

南方熊楠における普遍主義・自然主義・ナシヨナリズム

太田哲男

はじめに

南方熊楠（一八六七—一九四一年）の思想的営為の中に、一九〇六年から二〇〇年に及んだ「神社合祀」に対する反対運動があったことはよく知られている⁽¹⁾。

しかし、南方がこの運動にとりくんだ思想的根拠は、必ずしも十分に明らかとは言えないように思われる。そこでこの小論は、その思想的根拠の解明に資することをめざす。

それにしても南方熊楠の民俗学的あるいは人類学的な文章は、とくにその生存中に公刊されたものを見ると、一読して何を言いたいのかよくわからないことが少なくない。岩村忍氏は『南方熊楠文集』を編んだが、それに付した「解説」の中で、

南方の日本語の文章は、かれ自ら「話がこう長くなると、読者のみか、熊楠自身も何だか跡先が分らなくなる」といっているように放縱な文章が多い⁽²⁾。

と書いているほどである。南方は、多くの人が指摘するように、抜群の記憶力をもっていた。その記憶力の一端は語学の才能にも現れたと思われるが、彼自身は、在英中は「十八、九の語を自在に読」

んだ（八、508⁽³⁾）し、「小生、大英博物館で写せしもの、前日計えしに四万八百枚あり（頁にあらず）。わが邦で見られぬもの多く、またアルメニア、アラビア、ベルシャ等の語で、わが邦人の読み得ぬもの多し」（八、435）という蓄積をもっていたから、たとえば「おはぐろ」といったようなテーマについてさえ、おびたしい事例が挙げられることになる。南方自身もこうした方法について「小生は書きかけたら例多く材料多く挙ぐる」（往、368）と言っているのである。そしてその多くの例を南方は、「思いつき次第」（一、327）、「手当り次第」（一、56また二、429）、「盲滅法」（五、67）にならべた。なにしろ「材料があまりおびたしくてちょっと採択に困る」（五、431）という状況であり、「こんな話は藻塩草、かき集めたら限りなき」（四、478）ほどだったからである。

たしかに南方の諸論文は明確な体系性をそなえているわけではない。けれども、だからといってそれらはおびたしい話の単なる羅列なのではなく、雑学にすぎないのではない。鶴見和子氏がその『南方熊楠』の「初版はしがき」で、

わたしが「この本で」なしたことは、これまで「理論がな

かぞ

い」と判定されていた南方の作品群の底に、しっかりと構造のあることを発見した⁽⁴⁾ことである。

と書いているように、一定の「構造」をそなえているのである。この小論では、このような「構造」について詳細に論ずることはできないけれども、南方が神社合祀反対運動に深く関わったさいの、その思想的根拠となったと思われることにしぼって書いてみたい。

しかし、それを論ずる前に、神社合祀とはどういうものであるか略記しておきたい。神社合祀とは、一九〇六年から開始され、一村一神社を原則とし、その他の「凡俗衆」の建てた「淫祠小社」をこわし「神社の尊厳」を保持すべく、内務省神社局が神社合併を奨励することによって遂行されたものである。すなわち、一方で民俗神道的な神社を「規模がととのわず、崇敬・奉仕に欠ける神社」⁽⁵⁾だとして破壊し、他方で国家神道的な神社を保護することによって、神社の国家主義への一元化をめざしたものであった。

この神社合祀の実施の状況は、地域によって様々であるけれども、南方の住んでいた和歌山県では、一九一一年の段階で神社合祀のゆえに「滅却」した神社の数は五、五四七にのぼり、「現存」していた神社の数九四二の約四・七倍になる、という「むちゃくちゃ」な有様であった。(七、⁴⁹¹)

さらにまた、神社の森(鎮守の森)は、伝統的に伐採を免れてきていたのであるが、この神社合祀にともない、その鎮守の森の少ない部分が乱伐されるようになった。

こうした事態の進行に対し、南方熊楠は、神社合祀反対運動に挺身することになったのである。

一

この小論が明らかにしようとすることを結論先取的に言うならば、南方が神社合祀反対運動に挺身した思想的根拠には、第一に、彼の普遍主義的な歴史意識があり、第二に、彼の一種の自然主義があり、第三に、彼のナショナリズムがあるだろう、ということである。まず第一の点から見て行くことにしよう。

この第一の点は、南方の学問——それを南方学と呼ぼう——の方法論と密接に結びついているので、この南方学の方法や特色を見るために、まず彼の二つの論文をとりあげて検討しておこう。

「一」「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語(異なる民族間に存する類似古話の比較研究)」「(一九一一年)について。

この論文の冒頭で南方は「類似古話の比較研究」には「十分材料を集め、整理研究」しなければならぬと言い、さらに

古話においても、記録せる時代の先後は、必ずしもその話が出来^{しつた}せし早晚と偕^{ともな}わず。しかしながら、齊しく文筆の用を知りおりたる諸国民について、同種古話の記録の先後と、類似せる諸点の多寡を察すれば、大要その譚の、先だつていずれの国にもつばら行なわれ出でたるを知るに難からじ。(二、¹²¹)

と方法論的なことを書いたあと、ここでは「古話の同似せるものの記録、東洋が西洋より古き二、三の例」(二、¹²⁴)として具体例が並べられる。次にそれを見てみよう。

①一五二五年頃に初めて刊行されたある英文の本に、要約すると「その妻の腹に羊の画をえがいた男の話」とでも言うべき話が見え

る。南方が英国の友人に類話はないかと問いあわせたところ、伊、仏、独諸国に類話があるとの返事だったが、それはどれも十六世紀より古い話ではなかったという。けれども南方によれば、十三世紀の無住『沙石集』には、「この話あるのみならず、その前後の結構、欧州の諸話に比して一層詳細なり」という。南方はそこから、この話は「惟うに、根本は小乗仏典より出でしならん」と結論する。

② G・L・ゴムの『歴史科学としてのフォークローア』（一九〇八年）に、「うとんぜられた老父」とでも名付くべきスコットランドの古話が出ている。他方、南方によれば『史記』陸賈伝に同様の話が出ている。このことから彼は、

にわかに、スコットランドの古話が、支那の陸賈伝に基づく
と断ぜずといえども、子が成長して親を厭うの情状を叙せるこ
の類の記録は、東洋が西洋より早く、（二、127）
云々と書いている。

③ 『デカメロン』の第七日第九譚に見える「淫婦リジア」の話をめぐり、クラウストンという人はその類話を集めて、欧州には十二世紀以前にこの話を記したものなし、と結論した。しかし南方は『韓非子』（紀元前三世紀の作）の巻一〇にこれに似た話を見だし、英国の雑誌『ノーツ・エンド・キールズ』にそのことを書いた。A・C・リーという人はこの南方の文章を見て「古話の学する者、一齊に南方氏の発見を感謝すべし」と言ったという。

以上に三つ記したような例をあげたあと、次にシンデレラ物語に話は移る。

南方はまずこの話は西洋にひろく行なわれているのでその類話も

多いとして、C・ペドロソ『ポルトガルの民話』（ロンドン、一八八二年）に載せる三〇の古話のうちの三つがシンデレラ物語に類することをあげている。英国の里俗学会が、かつて広く諸国に存するシンデレラ物語の諸種を集めて出版した本がある。南方自身はこの本を読まなかったと書いているが、彼の友人に聞くと、その中には中国のシンデレラ物語ははいっていないという。そこで彼は、在米中に唐代（九世紀）の『酉陽雜俎』続集巻一に「支那のシンデレラ物語あるを見出し」（二、129）ていたことを記し、この論文を草したのであった。そしてこの『酉陽雜俎』の史料の価値についていくつかの側面から検討した上で、この「支那のシンデレラ物語」（葉限の物語）は、「往古南支那土俗の特色を写せる点多く」、「その里俗古話学上の価値」も高いことを主張している。（二、135）

南方のシンデレラ物語についての論文の内容は以上のようなものである。山室静氏『世界のシンデレラ物語』によれば、ヨーロッパでのシンデレラ物語研究の両期をなしたのは、コックス女史の『三四五の異型から見たシンデレラ』／＼猫の皮／＼蘭草の頭巾／＼（一八九三年）だという。この本の出版は南方の在英時代と重なる。南方がこの本を読んでいたかどうかはわからないけれども、南方のこの論文そのものが、シンデレラ物語についての研究の状況を彼なりに把握した上に成立したものであることは明らかである。

〔二〕次に南方の作品の中で最も著名である『十二支考』に収めてある「犬に関する民俗と伝説」（一九二三年）を見よう。南方はこの論文で犬に関する民俗と伝説を並べて行くが、その中に「犬が大蛇を殺して主人を助けた話」というのがある。そこではこの話の

種々の「異態」(ヴァリエーション)が並べられて行くが、その出典を次に書いてみると、

1. 『淵鑑類函』四三六「清代の百科辞典」
2. 『今昔物語』二九
3. 『和漢三才図会』六九「江戸時代の一種の百科辞典」
4. ベーリング・グールドの『中世志怪』およびクラウストン『俗談および稗史の移動変遷』
5. 中世欧州の教訓書『ゲスタ・ロマノルム』
6. ペルシャの『シンジバッド』
7. 馬場文耕『近世江都著聞集』四

といった具合である。南方はこのように類似の話を並べ、「これらの話、種々異態あれど、もと伝説に出たのだ」(一、499)として『摩訶僧祇律』の話を引いている。ここではそれらの話の微妙なズレを逐一書いていくことはできない(またその必要もなからう)から、南方が挙げている「異態」の一つのみを写しておこう。それは、

天正年中、領主宇津佐門五郎忠茂、獵して山に入る。家に白犬あって従い走り行く。一樹下に到り、忠茂にわかに眠りを催す。犬かたわらにあって衣の裾を咬えて引く。ややさめてまた寝れば犬しきりに枕頭に吠ゆ。忠茂、熟睡を妨ぐるを怒り、腰刀を抜いて犬の頭を切るに、樹梢に飛んで大蛇の頭に昨いく。主これを見て驚き、蛇を切り裂いて家に還り、犬の忠情を感じ、頭尾を両和田村に埋め、祠を立ててこれを祭る。(一、498)

というものである。『摩訶僧祇律』では、以上のような話のいわば

原型たる話を記したあとに、

時に空中に天あり、偈を説いていわく、「よろしく審諦に觀察すべし、にわかなる威怒を行なうなかれ。善友の恩愛離れ、枉害は信に傷害し」。(一、500)

とある、というのである。

〔三〕さて以上で南方の二つの論文の概略を記したのであるが、これを手がかりにして南方学の方法や特色を考えてみることにしよう。以上の二つの論文で目につく点は何か。

それは第一に、とり扱われている史料・典拠たる文献の巾の広さである。今ここに言及されているものだけを並べてみても、イギリス、スコットランド、イタリア、ポルトガル、インド、ペルシャ、中国、日本というような多様さである。しかもその多様さが、いわば地球的規模であることが特徴的である。

特に強調すべき点は、こうした諸史料が対等の位置に置かれているということである。近代日本においては、自己の欧米体験をふまえることによって日本を対象化するという知識人たちは少なくなかった。しかしその場合、欧米・対・日本は、客観的な比較の対象であったというより、どちらかの側に——たいていの場合は欧米の側に——価値的な優位を認めることを暗黙の前提としているという場合が多かったように思われる。それに対して南方学においては(南方の十数年にわたる外国での生活にもかかわらず、あるいはそれゆえに)、特定の国家なり民族なりに価値的な優勢をおくことをア・プリオリに前提にするということは完全に排除されているといえるであろう。もっとも、シンデレラ物語に関する論文の方では「西洋」

よりも「東洋」に対する思い入れがある、とは言えるかもしれない。しかし、その場合、「東洋」といっても日本だけでなくインドや中国がとりあげられているのはもちろんとしても、「西洋」の方では、スコットランド、ポルトガル、ルーマニアなどにも言及されていて、ふつうに言う欧米・対・日本（あるいは東洋）という対照とは異なることは注意されてよいだろう。

南方は「仏眼もて観れば」（一、73）という言い方をしているが、それは一方では、彼の論じた対象が——今世紀初頭という時代的制約はあるが——グローバルなひろがりをもっていたことによるとともに、他方では、どのような地域のものであれ民族のものであれ対等なものを見ていくといういわば人類的視点をもっていたことによるであらう。

第二に注目すべき点は、この「仏眼もて観れば」という視点の存在に関連することだが、そして先に概観した二論文だけでは十分に明示的とは言えないが、南方はこの論文にいうような種々の「異態」（ヴァリエーション）を書きつらねることを通じて、人間の持つ普遍的なものをあきらかにしようとしているということである。

この点は先に挙げた二つの論文に即して言うだけでは不十分だと思われるので、南方の諸論文の中から、この点が明瞭に出ているところを何箇所か引用してみることにしよう。

- ① 本邦と支那と西アジアとの人が、期せざるに同じくこのきわめて相似たる三話を作り……たるは、時千載を差え、道万里を隔つといえども、人情は兄弟なるを証するに余りありというべし。（三、58、点は引用者。以下同じ。）

- ② 今諸方の古話を比較するに、遼遠相関せざる地に箇々特生しながら、人情と範圍の同じきより、酷似偶合の談を生ぜるあり。（三、41）

- ③ 古今東西人情は兄弟なれば……（一、231）

- ④ 範圍さえあまりに違いなき限りは、衆人の考えや所行は、大抵、東西万里を距てながら、兄弟なりと存ぜられ候。（八、542）

このような引用から見ても、人間の持つ普遍性——それは必ずしも価値的に善とされているわけではない——の探求をこそ、南方学はめざしていたことが理解できるであらう。それは人間性——イギリス哲学ふう言うなら、human natureである——の探求学である。そしてその探求学を「仏眼もて観れば」という見地から行なうことによって、南方学は human nature の普遍性の探求学となつた。一のはじめのところで南方学の普遍主義的性格について言及したのは、このような意味あいにおいてである。

第三にはしかし、歴史性の問題がある。というのは、たんなる普遍主義的探求をするだけの話であるならば、先に「一」において見たような「古話の先後」を問題にする必要はないからである。なぜ古話の先後（どちらが古くからある話か）にこだわったかという理由はもちろんいくつか挙げることができようけれども、根本的にはその古話の歴史性が南方によって強く意識されていたからだろう。すなわち human nature の普遍性は、一方で古話が地域的に様々に変様する中で成立した「異態」が、それら相互間のニュアンスの相違にもかかわらず同一性を保っていることによって示されるところにも、他方では歴史の経過の中においても同一性を保っていること

によって示されるだろう。そのようにして human nature の普遍性が示されてこそ、いわば歴史の重み、あるいは厚み、が感得されるであろう。南方が古話の先後にこだわったのは、まさに人間の歴史の重み、厚みに対して鋭敏な感覚をもっていたからであろう。

以上われわれは南方学の方法・特色について三つの点を指摘したが、これを要するに、南方学はその特性のひとつに普遍主義的な歴史意識を有している、と言うことができる。

二

前節の冒頭にわれわれは、南方の神社合祀反対運動への挺身の思想的根拠には、①彼の普遍主義的な歴史意識、②一種の自然主義、③ナショナルリズムがある、と書き、前節ではその①の普遍主義的な歴史意識について説明した。その神社合祀反対運動との関連の考察は後にゆずり、次に南方学の自然主義的性格とはどのようなことを述べることにしよう。

南方熊楠の名はその「奇行」をもって知られている。確かに彼の論文の中に突如として自分のことを「よく男根出す男なり」（八、106）と書いているところなどが出てくると、読み手の側は当惑するかふき出すかであろう。しかし、彼の「奇行」にはゆえあってそうなっているものが少なくない。

例えば天皇への進講（一九二九年六月）の際、植物（粘菌）標本をキャラメル箱に入れて出したという話にしても、南方の娘である文枝さんは次のように言っている。

普通のキャラメル箱をまとめて入れる大きな箱でございます。ボール箱でできておりまして、あの頃それが一番丈夫でございましたから。いくらも桐の箱を作らせたのですが気に入らないのです。どうしてもこれが一番いいんだと言いまして、それにしました。（父、60、61）

すなわちここでは「桐の箱」という儀礼よりも、「標本の保存」という学術的観点を優先させたまでのことだったのである。

この例にも見られるように、彼の植物への徹底した執着は、世の人々から見ると「奇行」と写るという事態を少なからず生み出したのだった。そうしたことを示す点を次に例示しよう。

① 南方がその採集に勢力を集中したもののひとつに粘菌があったが、この粘菌は「せつかくとり来りし菌も雨ふれば腐り風吹けば乾きかたまり」（別一、163、また187、275にも同趣旨の記述あり）といった特性をもっていたから、その処理を一气にすまずべく夜を徹することはしばしばであった。

② 植物の標本の保存のために部屋にナフタリンを大量にいれ、ために頭が痛くなるほどであった（別一、434）とか、寒い冬でも戸を閉めて部屋で火をたくと、標本に悪影響が出るので火を入れなかった（別一、128、289など）ということもある。

③ 「〔谷川健一氏〕——先生がちよつと眠ってましたすぐ起きて勉強を続けるという超人的な生活をなさったことと、今のお話の粘菌が刻々と変化するのを観察する生活とはおおいに関係がありそうですね。」

南方〔文枝〕 そう、大いにありますね。粘菌も茸も、珍種はその

とき一度失えば二度と同じものが同じ場所でいつ発見できるかわからないのですから。」(父、31)

④ 南方文枝さんの話——「あるとき、銭湯へ行つて、間違えて他人の着物を着てそそくさと帰つて来て書斎に入ってしまったのですが、そのとき風呂桶の腐つたのを大事そうに持っているんです。いつも風呂屋の洗面台の下に古い桶が一つ置いてあったんですが、それに何か茸が生れつつあるのに目をつけていたんですね。その主人に桶を洗わないように頼んで数日後、期待していた黒い茸が生えたので嬉しくてたまらず、そのまま飛び出し、他人の着物をひっかけて帰つて来たのですね。奇行と申しまして、やはりそれぞれわけがあるのです。」(父、63)

以上に例示した四つの例からもわかるように、南方の「奇行」も、常人から見れば異常と感ぜられても、南方からすれば自己の研究対象の特性に拘束されているというだけの話であつたわけである。

その上、今ここに「自己の研究対象の特性に拘束」と書いたけれども、南方本人の意識からすれば、それは別に「拘束」というより、喜びでもあつたようである。例えば、再び文枝さんの回想だが、

粘菌できれいながあると、とても喜びました。「きれいな、よく自然にこんな色が出たものだ」と家内じゅうを呼びまして、顕微鏡を一人一人の度に合わせて見せてくれました。

(父、62)

とある。また、南方の植物への関心も、すでに幼少の頃からあつた。例えば、

父の幼馴染みの故板井知雄氏が言つておられましたが、小学

校へ行く頃から、お弁当箱の中に藻のようなものをいつもつけていたそうです。朝、学校へ行きしなに水底の藻を見つけると、そこでお弁当を食べてしまひ空にして。(父、55)

というふうなものである。明らかにここには、植物学への関心というより、植物への関心が躍如としている。そうであればこそ彼の植物蒐集の徹底性は生まれたのである。例えば

「淡水藻類の標本(ガラスに装置せる顕微鏡プレパラート)」だけで六千枚を数えた(別一、36)

などということがそれを示している。話は少し飛躍するけれども、南方のこのような植物への関心を見てみると、アリストテレスの『動物誌』のことが連想される。アリストテレスの動物関係の著述には、他に『動物発生論』『動物部分論』があるけれども、そこにアリストテレスの、動物学への関心はもとより、動物そのものへの関心が躍動していることは明らかである。末広恭雄氏はアリストテレスの『動物誌』の魚類の記事について、

紀元前三〇〇年以上も昔に、魚類に関してどうしてこれだけの観察ができたのか、全く不思議に思われるくらいで、ただ驚きあるのみだ。

と記し、木村雄吉氏は、アリストテレスの『動物部分論』に即しながら、

まことに、アリストテレスという生物学者は、ものの真実を「学ぶ喜び」に推進されてゆくのであろう。

と書いてある。動物への徹底した執着と、それにともなう喜びは、対象こそ違ふけれども、南方においても同様であつたらう。

今少しアリストテレスの場合との類比を続けるならば、アリストテレス学者は、彼の動物学が彼の『自然学』や『形而上学』とどのように関連するかに関心をもちたろう。その場合、存在するのは動物学への関心であつて、動物そのものへの関心は必ずしも存在しないということがあり得るであらう。

似たようなことは他の場合においても言えることがある。例を日本にとれば、三浦梅園や安藤昌益の場合にも、梅園の示した自然、そのものへの興味・関心から離れて、梅園の学問——一種の自然学——について論ずるという研究が成立し得るだらう。昌益の場合にも、——その当否は別として——そういうことがあるだらう。

今われわれは、右に若干例を挙げたような、広く言つて自然、そのものへの愛着・関心をその思想の基盤におく立場を、自然主義と言ふことにしよう。(ただしアリストテレスの場合にはもとより、昌益の場合でも、その哲学なり思想なりの全体を自然主義として特徴付けることはもちろん適切でない。しかし、右に記したような自然、そのものへの愛着・関心がアリストテレスの哲学のひとつの基盤になつていゝるとは言えようし、そうだとすれば、ここで記したような意味での自然主義的な側面を、アリストテレスの哲学が持っていると言ふことはできよう。)

自然主義をこのように定義付けたならば、南方熊楠の学問的営為の中に、自然主義的性格があるのは明確であらう。

三

さてわれわれは一において南方の普遍主義的な歴史意識について説明し、二において南方の思想的営為における自然主義について説明した。次の問題は、この二つ及びナショナルリズムが南方の神社祭祀反対運動への挺身とどのようににかかわっているか、である。

まず第一に、自然主義にかかわる方から見ていこう。すでに「はじめに」において述べたように、神社祭祀の動きは鎮守の森の乱伐を伴つていた。先に述べたような意味における「自然主義」者南方がこれを座視するはずはない。

神社祭祀の動きを森林乱伐を軸として考えるならば、それに反対する南方の論拠はほぼ次の二点になるであらう。

1、鎮守の森は従来「神林」として崇められてきたため、珍奇な動植物をよく保存している。そのような森の乱伐は、そこに生存する珍奇な(あるいは学術上価値のある)生物を絶滅させるおそれがある。(六、29。七、51など)

2、次は鶴見和子氏が明らかにされたような「エコロジーの立場に立つ公害反対」という主張である。すなわち、自然破壊の政策に、生態学^{エコロジー}の発想をもつて抵抗する、というものである。

しかしわれわれの見るところによれば、この二点の根底には南方の自然主義がある。言いかえれば、南方の自然主義が右の二点の主張を生みだしているのである。

第二に、普遍主義的な歴史意識にかかわる点であるが、この点については、南方の神社の位置づけと関連している。そこで南方が神

社をどのようなものと考えていたかを略記すると、この文脈では、

1、諸神社は様々の祭式、文書、古物、俚伝を付属し伝えて来ている。(それら一切が神社合祀のため失なわれてしまう。)

(往、51また七、47)

2、国民の「元氣道義の根源」である。(七、531)

3、日本の神社は一種の公園である。(六、29、152)

というような点が注意されなければならない。南方は、「伝説や民俗の研究が社会の組織や履歴を調ぶるに大必要」(五、41)と書いているが、そのことと右の1に記したことをあわせ考えれば、諸神社の存続こそが「大必要」ということになる。

その民族の履歴を調べて行こうとする際、南方は「むやみに自國を無垢らしく説かん」(三、539)とすることは不当だと考え、また「今日日本のことを日本の風(スタイル)でのみ書くは迂廻はなはだし」(別一、13)と考えたのである。すなわち「日本の伝説を積く前に、及ぶ限り外国にも同様また類似の例の有無を調べおくは、無用の弁を省くために緊要と考う」(四、360)ということになる。

このような南方の姿勢は、日本に伝えられる諸話を、できるだけ普遍的な相の下に理解していこうとする努力であるといえるであろう。言いかえると「一国一地方のことばから究むるだけでは、その一国一地方のことを明らめえぬ」(一、232)ものである。けれども「原始より今日に至る諸邦人民の履歴」(往、267)も複雑をきわめる。そして「材料豊富ならずば真の比較はなりがたし」(往、367)である。だから南方熊楠という人物は、事実として極めて驚嘆すべき博識であったのであるが、彼の方法論から言っても、博識でなけ

ればならなかったのである。

だが、第三に、この普遍主義的歴史意識の問題は、彼のナショナルイズムの意識と密接につながっている。

近代日本思想史の流れの中に南方学をおいてみよう。近代日本の思想家の中には、自己の思想の「モデル」を、あるいは自己のめざす「理念」を、西欧の中に求めるという人々は少なくなかった。その場合、普遍的なものは西欧的なものであることになった。しかし他方、それに対抗して、西欧型の「理念」を即ち普遍的なものとするを拒否し、何らかの意味で「日本」的なものをおしだそうとする人々も存在した。

こうした状況の下での南方学の位置は独特であるように思われる。すなわち単に偏狭に「日本」的なものを押し出すには余りにも外国(主に英国)生活の長かった彼は、あくまでも人間性(human nature)の普遍性の探求をめざす。しかしその「人間性」のモデルたるべき実体は、西欧だけに存在するというようなものではなかった。だから、例えば、「民主主義」や「マルクス主義」や「キリスト教」などの場合のように、それをどう日本に根づかせるか、といったような課題はそもそも生じてこないのである。

南方にとって「普遍性」は、日本に根づかせるべきものではなく、日本の中に発見すべきものであった。すなわち、一種の普遍学を日本の中から築いていかなければならなかったのである。「日本の中に」と言うが、具体的にはそれはどこにあるのか。もちろん一方では「書物」であった。しかし他方では人々の間に伝わる祭式や俚伝などに見いだされるものであった。

確かに神社に伝わる「俗話」ははなはだおかしなものも少なくない。しかし「多くの俗話が今日いかに異体不可解に見受けらるるも、実は往事、権兵衛も太郎作も平常見聞して当然と做し、たやすく呑み込み得た事実の外なら」ないのであり（五、449）、そうした「俗話」を保存している神社を破壊することは、日本の履歴を失なわせることにつながる、と南方は考えたのであろう。それゆえ、神社合祀を止めることこそ「真摯なる日本研究これより起こる」ところのもの（往、114）だということになる。日本全体もさることながら、「古いものは一村一郷の精神の基本」（別一、490）であり、まさに神社は「国民気道義の根源」（七、531）であるという認識があったのである。

南方は「東洋を見ぬ泰西人の書籍のみ読んで、それに載せぬことは学論にも研究にも適せぬことのように思ひおる人が多いらしいのは実に歎息の至りだ」（六、58）と書いている。また「科学などということは十分東洋にもありしが、」（七、222）とか、「わずかに数百年来東洋が西洋に科学が後れおるが、その前はさまで西洋に劣らなんだ次第を述べて、いささか東洋のために気を吐いた」（六、58）とか、さらに「西洋人がインド、支那の道学宗教に少しも哲学なしなどというは」間違いだ（七、347）とかいうような発言は各所に見うけられる。

すでに一において述べたように、南方学は普遍主義的な歴史意識に立つものであった。換言すれば「諸邦人民の履歴」の中に、普遍性——すなわち人間とは何かという問題——を探索しようとするものであった。そのような南方学においては、こうした普遍性がより早

く自覚化されているということは、それだけ誇るべきことであったのである。その自覚化がどのように進んで来たのかを見ることは、まさにわが邦人民の履歴を明らかにすることであり、それはまさに「日本のため」であるという意識（一種のナシヨナリズム）を南方は持っていた。（八、196、また往、15、42、161など）

このような南方学にとっては、神社合祀はまさに自己の存立基盤そのものにかかわることになり、それゆえ、どうしても阻止せざるをえないものだったわけである。

即ち、南方の（右に見たような）ナシヨナリズムが、彼の神社合祀反対運動への基盤に存在している、ということになろう。

以上においてわれわれは、南方の神社合祀反対運動への挺身の思想的根拠として、第一に彼の自然主義、第二に普遍主義的歴史意識（諸邦人民の中に普遍性を探索する人間学）、第三に第二点と密接に結びついた彼のナシヨナリズムがあるだろうということを説明した。最後に、このような南方学のあり方の今日的意義と思われる点を若干記してまとめにかえよう。

現在、いわゆる環境問題はまさに地球的規模で大きな注目を集めている。森林破壊の問題に勢力的にとりくんだ南方の、その営為はそのような点からも先駆的意義をもっている。先に鶴見和子氏の「エコロジーの立場に立つ公害反対」という南方の見地の特色づけを紹介したが、そのエコロジーはアメリカなどでは一九六〇年代前半までは「ヨーロッパ・ナチュラリストの伝統を継ぐ政治色のない「おとなしい」科学であった」という。しかしそのエコロジーも六〇年

代末のベトナム戦争の激化とともに変様していったという。⁽¹⁾ そのように変様していったエコロジストたちの先駆に、われわれは南方熊楠をおくことができるだろう。

だが「環境問題」というのは、たんに、自然環境のみにかかわるのではない。一九七二年にストックホルムで開かれた国連人間環境会議で「公害とならんで自然環境と歴史的環境の破壊を世界的な人間遺産 (human heritage) の破壊であるとして、各国が協力してその防止に立ち上ることが確認された」⁽²⁾ ことに示されているように、まさに「歴史的環境」にもかかわるのである。もちろん何ををもってその「歴史的環境」とするのか、ということは一義的に明確になっているわけではない。しかし、くりかえし述べたように、人間とは何かという問題を「諸邦人民の履歴」の中に探求しようとし、まさにその履歴を破壊するものであると南方が考えた神社合祀（破壊）に対し断固抵抗の姿勢をつらぬいた南方の生き方は、まさにその「歴史的環境」をまもるための先駆的努力として位置づけることができるであろう。

今一つ付け加えるならば、南方の「自然主義」の問題がある。今日の自然環境の中で緑を守る動きが活発化して来ている。どのような意図からであれ、結果的に緑の保全がなされることは歓迎されるべきことであるけれども、そこにはやはり何らかの程度において、自然そのもののへの愛着・関心が根本のところ で存在するという、先にわれわれが「自然主義」と呼んだものがなければならないだろう。そうだとすれば、南方の、自然学——古い言い方だが——への関心を、というよりも、自然そのもののへの関心を、いっそう重要なもの

とみななければならないだろう。

註

- (1) 南方についての最近の著作には次のようなものがある。笠井清『南方熊楠』（吉川弘文館、一九六七年）、同『南方熊楠——人と学問——』（同、一九八〇年）、同『南方熊楠——親しき人々——』（同、一九八二年）、樫山茂樹編『南方熊楠先生小伝』（紀州政経新聞社、一九六七年）、飯倉照平編『南方熊楠 人と思想』（平凡社、一九七四年）、鶴見和子『南方熊楠』（講談社、一九七九年）。なお末尾の略号表も参照されたい。

- (2) 岩村忍編『南方熊楠文集2』（平凡社東洋文庫、一九七九年）「解説」、387頁。

- (3) 以下の（ ）内の略号註記については、末尾に付した略号表参照。

- (4) 鶴見和子『南方熊楠』（講談社文庫版、一九八一年）、5頁。

- (5) 『内務省史』第二巻、44頁。

- (6) 山室静『世界のシンデレラ物語』（新潮社、一九七九年）。

- (7) 末広恭雄「動物誌」に記されている魚の話題」、『アリストテレス全集・第七巻』（岩波書店、一九六八年）所収の月報による。

- (8) 木村雄吉「動物部分論」における生物学思想」、『アリストテレス全集・第八巻』（岩波書店、一九六九年）所収の

月報による。

(9) 鶴見、前掲書、222頁以下。

(10) 中山茂『科学と社会の現代史』（岩波書店、一九八一年）、20頁。この引用文の中に出てくる「ナチュラリスト」というのは、本稿で言う「自然主義」者とはほぼ同じ意味あいで見られているものであると言えよう。

(11) 同前。

(12) 木原啓吉『歴史的環境』（岩波書店、一九八二年）、169頁。

略号表

一などの漢数字……『南方熊楠全集』（平凡社、一九七―一五年）全一〇巻、別巻二冊からの引用は、巻数のみ表示し、その後に引用頁を付す。以下も同じ要領。

往……飯倉照平編『柳田国男南方熊楠往復書簡集』（平凡社、一九七六年）

父……南方文枝『父南方熊楠を語る』（日本エディタースクール出版部、一九八一年）

付記

私は昭和五十六年度科学研究費補助金（奨励研究(B)）の交付を受け、その成果をすでに「南方熊楠」という報告書にまとめた。この「南方熊楠における普遍主義・自然主義・ナショナルリズム」は、若干の箇所においてその報告書に重なるところがある。